学内研究者雑誌発表論文リストについて

山 根 京* 尾 白 紀 子**
立 木 智 子*** 大 倉 恵 子****

①作成まで

昭和42年9月から本学で発足した参考業務設置以前に、一図書館員により、入館者記入名簿による図書館利用調査がなされた。(この調査は、図書館内のミーティングで公開される為に全く個人的な発意によって行なわれた。)期間は昭和41年5月~11月の6カ月間。又、この調査と併せ、昭和41年10月~42年12月までの医学中央雑誌(220~232巻)に掲載された学内研究者の全件が、カードの形で作成された。

入館者記名が入館者実数の20%という甚だ不確実なものではあるが(入館の際必ずしも記名しないので)、そこに現われた人名と、医中誌掲載者を照合した結果、図書館利用者による研究発表154件に対して、無記名者発表195件という数字が出た。

情報源は必ずしも、図書館の文献を利用しなくとも、各部局に備付の蔵書があり、又、最新の情報は、研究者間の情報交換で、こと足りるということであろうか。

現状はさておいて、これから、図書館に於て、館員がactiveなサービスをしていく為には、どうしても利用者の研究主題を把握することは必然である。その一手段として、まず、適及的な把握ではあるが、医中誌を用いて、学内研究者カードが、引続き作成されることとなった。

②その過程

このカード作成の意図からは、少なくとも、氏名別リスト、部局別リスト、主題別リストの3種類が作成されることが望ましいのだが、作業開始の時点は、参考業務の発足から日も浅く、人員、時間の点等から、氏名別リストのみが作成された。しかも、それは日常業務の中に

はっきり組み入れられた形ではなく、閲覧係の人が、片手間に着手することになった。

カードは、市販の図書カードを使用し、医中誌到着毎に“(東女医大)”と明記してある著者の論文すべてをピックアップし、著者・論題名・雑誌名を記入。配列は著者のアルファベット順によった。共著者は、すべて、一番目の著者への参照カードを作成していたが、後、時間的経済を考えて、ガリ版で印刷し、標目をつけることとなった。例を示すと次の通りである。

〔前〕

参照カードから

	安 達 順 子
	生体時体重1000g以下の未熟児哺育例(会)
	See: 阿部栄子
	○

	阿 部 栄 子
	生体時体重1000g以下の未熟児哺育例(会)
	阿部、喜里山、大内、安達、共著
	日児会誌 72(10) 1526 '68.10
	○

253-412 医中誌 巻, 頁

* Kyo YAMANE, ** Noriko OJIRO, *** Tomoko TATSUKI,
**** Keiko OKURA 東京女子医科大学図書館

〔現在〕

印刷カードによるもの

遠	藤 光 夫
	胃囊腫の 2, 3 の検討(会) 中山 恒明, 太田八重子, 遠 藤 光夫, 望月 宜之, 御子紫幸男, 鈴木 茂, 秋田 善昭, 共著 Gastroenterological Endoscopy 9(1) 58-59 '67.4

秋	田 善 昭
	胃囊腫の 2, 3 の検討(会) 中山 恒明, 太田八重子, 遠 藤 光夫, 望月 宜之, 御子紫幸男, 鈴木 茂, 秋田 善昭, 共著 Gastroenterological Endoscopy 9(1) 58-59 '67.4

尚, guide card には, 著者名と, その所属を明らかにした。

阿 部 栄 子 (小児)

③問題点

こうして, 氏名カードのみが作成され, 現在に至っているのだが……。

出発段階から予想されるべく, 当然のことながら種々の問題が起こってきた。

国内誌発表に限っていること, 主題別, 教室別のファイルがないこと等々である。

カードは機械的に次々と作成され, かなりの量になるのだが, 如何にせん, 利用は少しもふるわない。利用不振の原因は, どこにあるのであろうか?

先に述べた, カード上の問題も大きい, それ以上に実に, 私達図書館側の姿勢にあるのではないだろうか。ファイルの置かれた意義, 位置が, 図書館の中にはっきりと認識され, 確立した一つの仕事として十分に吞込まれていなかったことが最大の原因であるように思われ

る。ルーティングの中にも組み入れられず, カード自体の検討もなされないまま, 図書館員からも, 利用者からも注意を注がれないままの状態である。

利用の不振原因を箇条にすると,

1. ファイルの仕方に問題(著者名順のみであること)
2. PR 不足。
3. 利用者の図書館そのものに対する認識の低さ。
4. 図書館員自体の認識不足。積極的なサービスへの姿勢に欠如していること。

以上, このままでは, 単なる個人個人の業績目録に終わってしまうようである。

④User Study

ここで少し現実的な問題を離れて user study を考えてみたい。まず, 当図書館を基準にして考えてみると, 次の 3 段階に分けることができる。(段階 1 は勿論のこと, 段階 2 も本来の user's study ではないが。)

○段階 1

本来, 図書館は(二次資料を含む)文献に精通し, 図書館 tool を用い, あるいは経験から user の探し求める対象を引き出すことによって advice する。

○段階 2

user の執筆し発表した論文によって, user を知る為 file を作成。ここで文献から user への→(矢印)が出来, そのことによって, 図書館は文献を通じて user とのつながりを僅かながら持つことができる。

○段階 3

しかし, 利用者に積極的なサービスをしていく為には, (user の興味の対象) そのものに, 図書館側は入っていかなければならない。

こうすることによって、図書館は user の need を文献を通じて知るよりも、時期を得て明確に捉え、利用者に適切で active なサービスが行なえることになる。

当図書館では、現在2の段階であり、しかもそのファイルの利用は不活発である。3の段階までいくのが理想であるが、質問法、観察法、実験法等によって user study を実施するには、残念ながら現在の当図書館はあまりにも未熟すぎるといわねばならない。始めるにあたっては、まず図書館員の深い認識がなければならない。研究者側の立場も考えねばならない。又、実施するにしても、余程検討された様式を用い、基礎データを収集し、しかも逐次、カレントな情報を集めていかねばならない。

こうしたことを考えてみると、user study 以前に当然行なわれるべき、きめ細かなサービスがあるのであって、しかも当図書館に於ては、それすらも満足されてはいないのではないだろうかということである。勿論ここにとどまっていたはならないし、積極的なサービスをする為には、段階3へ近づいていかなければならないことはいうまでもないが……。

しかしながら、ここにもう一つの問題がある。果して研究者はこれ程の need を図書館に対して持っているかどうかである。

勿論 現状では、研究者の図書館そのものへの認識が低い(これは研究者側のみの責任ではなく、その大部分は、図書館側の現状サービスの低さによることが大きい)ことを考慮して、その need を測らねばならないのであるが……。

ここで津田氏の論文を引用すると、

“科学者の図書館利用については、科学者が情報を探する場合の約半数が資料によらず、仲間に聞く方法を取ることを指摘し、図書館に頼ることが非常に少い事実を明らかにした。そして結論として、図書館は研究者が必要とする単純な情報を提供するには役に立ち、それを要求

される場合は非常に多いが、一方複雑な情報やむずかしい情報になると、ほとんど役に立っていないと述べている”。(津田良成：医学図書館に於ける文献情報探索サービスとその限界, Library Science, No. 4. 1966. p. 69.)

user study による active なサービスにも、限界があることを知らねばならない。

④' 以上の問題は別にして、比較的容易に当図書館で、user を知る方法として、文献調査の依頼を受けた時、その調査が user に対してどのような利益をもたらすか、つまり user の研究のどの段階に位置し、又どのような方向に向かって研究がなされているのかを知らせてもらうのである。

この方法は、包括的には行なわれないが、一部でも研究者の研究動向の比較的新しい情報を得るのに役立つと思われる。

⑤再びファイルについて

ところで、再び学内研究者ファイルの方に戻ってみよう。多少のタイム・ラグは承知の上、user を知る為の客観的な方法としてこのカードが作成されたのであったが、以上考慮してきた、さまざまな理由によって、続行に対して否定的な見方が多くなってきた。改革すべき点、否定的な面も多いが、このままの状態でもう一度肯定的な面を考えると、一体どういうことになるだろうか。

館長に、研究者としての立場から、このファイルを検討してもらった結果、次のような見方もでてきた。“本来、図書館側の意図したレファレンス面での利用価値はなくとも、続行することによって、業績集として一つの歴史的価値がある。研究者は案外、自己の業績をまとめていないもので、その為にも、大いに利用されるであろうし、利用のないのは、PR の不足によるのではないか。又、現在のカード形式から、ある量になったら冊子体にして保存していく方法もある”。ということであった。

現在、短期間の蓄積であるので考慮されなかった業績集という形が、打ち出されたわけである。しかしながら、単なる業績集としてなら、それは図書館として行うべき仕事であろうか。又、単なる業績集に終らせない為にはどうしたらよいだろうか？

⑥業績調査

ところで、業績調査をしている課が学内にもある。とすると、単なる業績集に留まるものならば、何も図書館でやる必要はないわけである。しかし、これは一面的な見解であって、全く図書館の意図から離れたファイルと

して見た場合にすぎないことを考えねばならない。

さて、この課ではどのような方法で調査がなされているのかというと……。年一回、学内研究者に対して自主的に論文リストの提出を依頼し、一方“東京女子医科大学雑誌”に関する情報はすべてリスト化してある。図書館のファイルと異なり、国外発表をも含み、論文発表の時期によっては、それ以前に入手出来るという利点もある。しかしながら、義務づけられていない為きちんと提出がなされないことも多く、不完全なものになっていることも事実である。

この業績ファイルを利用する研究者は、かなりあるらしく、教室業績集としての価値を多に認め、積極的にファイルに協力してくれる教室もある。しかしながら、中には、たまたまその年に業績がないことを恥じて、このファイルの存在を嫌うものもあり、又、全く非協力的な研究者もあるそうである。研究者には、ある程度の閉鎖性、排他性は免れないものらしいが、資金援助に対する報告の義務というものは当然あってしかるべきだし、研究の重複防止その他多くの利点も考えられよう。

さて、この業績調査ファイルであるが、図書館とはある程度独立した位置にあり、図書館にその写しをもらうわけにもいかないの、図書館の中で、これを図書館的な立場から活用させてもらうことも、不可能な状態にある。しかし、全くの非公開というわけではないので行っ

て見ることはできる。だが、距離的な問題その他諸問題があり、身近に利用することは不可能である。本来なら、この課と図書館が一致協力して、その課にはその課の目的に沿うよう、又、図書館は図書館の立場から、このファイルを充実し利用できる状態にもっていくのが理想的なのであるが……。この点、もう少し考えなければいけない——これからの我々の課題である。

⑦まとめ

さて、学内研究者ファイルが、あるがままの形で利用されるとしたら、どのようなことがあげられるであろうか？ 繰り返しになるが、一応確認してみよう。

研究者にとっては

1. 自己の業績を一覧することができる。
2. 学内で誰によって何が研究されているかを知る。
3. 教室業績集を作製する際の資料となる。

図書館にとって

1. 学内の研究テーマを把握できる。
2. 参考業務の資料ともなり得る。

今の形では種々の問題があるが、研究者への PR と共に、よりよい整理方法を、研究者と共に考慮し、発展させていくことも不可能ではない。しかしながら、時間的・経済的、そしてそれよりも、図書館の在り方として、もっと検討していかなければならない問題を多く含んでいることも事実である。

p. 64 より続く

れ、絶括的な見地より編集・発行されるべき性格のものであることは明らかなことである。しかし Reference Service 機能独自からの詳細な報知は、それ自体館報とは別に位置づけられるものと言えるのである。

結 び

以上図書館業務の把握と関連して館報や新着案内の特徴を、また館報や新着案内の編集発行上の問題となる要素を考察したが、これらを踏まえて結論を言えば、はじめに図書館のサービス活動に Reference Service の機能がみられなかった間は、利用者を引きつけるサービス活動がゼネラルな報知、書誌・目録の報知が（そして今日で考えられる Reference 的報知も そうだが）未分化のまま一括されてきたと言えよう。したがって我々が広義に呼んだ新着あんない等をもひっくるめたものとしての館報の今後の把握は、（1）その編集発行についてサ

ービス対象（発行対象）によって、図書館のさまざまなサービス業務上に位置づけられるべきものと考えられること、言いかえればその機能的な意味がサービス活動として位置づけられること、（2）それに伴って図書館活動としての館報が分化されていくこと、（3）そしてそれら機能的に分化したサービス活動を統合しうるような組織構造が必要であるとともに、その構造的なサービス活動の把握を目的とするゼネラルな館報が必要であると考えるに至る。ここではじめにあげた狭義の館報の意義はこの（3）の点に触れうるものとして特徴づけられる故、我々はこれを「館報」と考えることを明らかにしたい。

引用文献

- 1) 植村長三郎編著：図書館学・書誌学辞典。有隣堂印刷 1967.
- 2) 石井 敦編：PR と図書館報。日本図書館協会 1967.
- 3) Nakato News. 1 卷 1 号, 1966.